

書評

J. H. Plumb (ed.): *Crisis in the Humanities*, 172 pp. Penguin Books.

山田 泰 司

科学畑出身の小説家であり政府の行政官という特異の立場から、C・P・スノー(Snow)が『ニューステーツマン』紙一九五六年十月六日号に「二つの文化」という論文を寄せ、引続き一連の論文や講演によってその論旨を敷衍するに及んで、人文学(the humanities)によって培われてきた伝統文化と最近にわかに勢を得るようになった科学文化との隔絶と対立が鋭く提示され、この問題が知識人の間に大きな反響をまき起こしたことは、わが国でも既に知られているところであろう。スノーのこれらの論文や講演は、ある意味では、人文的教養人、科学的教養人という両極への呼びかけであったが、どちらかというと前者に対してより挑戦的なひびきをもっていたため、人文科学にたずさわる者の間に、より真剣な論議と深刻な反省とを強いる結果になった。と同時に、中世以来、イギリスを含めてヨーロッパの大学教育において中心的な不動の位置を占めてきた人文学のこれまでのあり方に再検討をうながす気運を生じたのである。ここにとり上げる『人文学における危機』はそうした動

きの端的な現われのひとつと見られよう。

本書は歴史家のJ・H・プラムを編者として、古典語・歴史・哲学・神学・文学・美術・社会学・経済学それぞれの専門家が、各々の学問分野における現状を述べその改善すべき点を指摘し、さらに「中等学校における人文学の教授」という一章を補足したものである。社会学と経済学とは普通人文学には含めないが、科学と人文学との橋渡しの学問として取り上げたと編者はことわっている。(また、神学は元来人文学とは対立する学問であるが、人文学を問題にするとき、切り離して考えることのできない学問なのである。)これらすべての論者に共通するのは、今日のごとき科学技術時代において、それぞれの学問をいかにして意義あらしめることができるかという自己反省の態度である。編者プラムは序文で「人文学にたずさわる者は、その社会的機能について確信がないために、ともに自滅的な二つの方向に逃避した。すなわち盲目的に伝統的な態度にしがみついて、彼らの機能が昔のままであり変化をはねつけさえすれば万事うまく行くと見せかけるか、各自の専門に閉じこもって自分の学問になんらの社会的機能をも認めないかのいずれかである。それ故、人文学は存亡の岐路に立っているのだ。現在あたえているイメージを変えて科学と技術によって支配されている社会の必要に適應するか、引込んで社会的にどうでもいいものになり果てるか、いずれかの道を選ばねばならない」と述べている。幸か不幸か、わが国では、現在のところまだプラムのいうようなさし迫った危機感を感じられていない。すぐれ

た学者が平易なことばでしろ、とに語りかけるといったことは、かなりひろく行われ、かつ成功しているように思われる。しかしイギリスと比べて日本はそれ程幸福な状態に置かれているのであるうか。プラムによればイギリスではホームーの翻訳が何百万部、ツキディデスが何十万部、タキトウスは何万部と売れ、古代世界に対する知識欲はほとんど飽くことを知らないほどであるが、専門の古典学者が一般向きのものに筆を染めることは滅多になく、そういうものを書くのは大抵学問の外辺に住む者たちで、専門家は彼らの昔ながらの技能を後生大事にしてパークの一節をキケロ風の散文に訳すといったトリヴィアリズムに陥っているし、歴史についても同じで、過去について知ろうとする一般の要求は非常に大きいのに、そうした要求を満足させているのは専門の歴史家であることは稀で、むしろ天分あるアマチュア歴史家であることが多いという。哲学は人生から全く遊離してしまつて言葉の判じものとなり、美術は、せっかくなか何百万という人々に手をさし伸べる事ができるようになつた今日、わけのわからない特殊用語か深玄な図像学のなかに迷い込んでしまい、社会学者や経済学者のなかに旧式な学者たちの軽べつを受けて挫折し、ことさらに氣どつた専門用語に逃避してしまつた者もある。要するに、人文科学も社会科学も現代世界の教育的、社会的要求に正しく適合していない、とプラムはいつているのである。ただし、いかなる学問にせよ、じかに社会の要求にこたえることが決して容易でなく、またそうすることが望ましくもないことは一目して明瞭であるう。た

だ、人文科学と社会科学にあつては、自然科学の場合よりも一層、社会への寄与と学問の純粋性という二律背反に悩まねばならない宿命を負わされている。本書の執筆者の論述が時に歯切れのわるいのはそのためであるう。

M・J・フィンレーによれば「古典における危機」は二つの異なつた面から考察できるという。すなわち古典語教育の内容と古典の翻訳(英訳)の問題である。古典語教育の内容は従来厳格に限られたものであつた——作家でいえば、まずキケロ、ツキディデス、初期のリヴィウス、それから保留つきでプラトン位なものでアリストファネス、ジューヴィナリスなどは排除されてきた。つまり近代の功利的価値判断から道徳上のためになる著作家のみをとり上げてこれを礼賛し、ギリシア・ローマ文化に対して批判的な態度を養うことを怠つてきたといふのである。古典が現代人にとって無比の重要な価値をもつていふかのごとく説くのは、かえつて古典を冒とくするものであつて、ただ古代ギリシア人が西洋ではじめて、自主的な合理的探求の可能性を発見し、政治的、倫理的、哲学的諸問題を展開して見せたことに意義があるのであり、そこに見られる欠陥や失敗のゆえに、一層われわれ現代人の反省をうながすのである。また古典語の技術のみを重視する傾向も改められなければならない。将来古典学者にならない大多数の学生のことを念頭に置いて古典語教育を施さねばならない。ギリシア・ラテンの作家を原語で読むことができ、そして実際に原語で読んだイギリス人は、いつの時代にもごく限られた少数者であつた。例えばジョンソ

ン博士はギリシア語に堪能でありホーマーを最大の叙事詩人と見なしていたが、『オディッセイ』全部を原語で読んだわけではなかったし、ポーブの『イリアド』の英訳をその多くの欠点にもかかわらず弁護したのである。イギリスには古典語について原語主義がなお根強く残っていて、古典の翻訳を軽べつする傾向が強いが、古典語を読めない圧倒的多数の人々を考へるとき、たとひ翻訳によっても古代人について知ろうとする熱意と機会を彼らから奪うべきではあるまいし、専門の学者はそうした翻訳に序文や註釈を書くことを恥ずべきではない、とフィンレーは述べている。また、いったん翻訳による古典への門戸が開かれると、古典語を専門的に研究する者がなくなると心配されている向きがあるが、その心配はない、と樂觀している。わが国の漢文教育と考え合せて興味深いものがある。

歴史については編者のプラムが「歴史家のジレンマ」という題で書いている。プラムのいう歴史家のジレンマとは、現代の歴史家が「歴史的客観性は存在し得ない(と考へている)のに科学者のごとく行動しなければならぬ」というジレンマのことである。十九世紀における自然科学の著しい進歩は歴史家たちに深刻な影響をあたえた。彼らは科学の正確さ、その論証の明晰さに感嘆し、そうした方法が歴史にも適用されるべきだと考へた。同時に、実証哲学の流行と成功は理論よりも科学的方法は理論は自然とあとからついてくる、というのである。歴史的な事実は真砂のごとく数限りないものであるが、それは歴史家を

思い止まらせることにならなかった。十九世紀最大の歴史家ランケは、あらゆる事実は等しく重要であつて「事実の精確な提示こそ歴史編修の最高法則である」と信じていた。こうした科学的方法は歴史学の発展に絶大の寄与をなしたが、個々の研究はそれ自体目的となり歴史家による歴史家のための研究になつてしまつたのである。こうして歴史学は科学的になつたのであるが、いくら科学的になつたといつても、その科学性は眞の科学研究のもつ厳密さに及ぶはずがなく、歴史研究の究極的価値に対する信念を欠いていたのである。そして、こうした当然の劣等感に専門的研究活動の無政府状態によつてばかりでなく、歴史研究にしみ込んでいる精神的ニヒリズムによつても悪化された。これは十九世紀歴史研究における第二の重要な発展——歴史的相対主義(Historicism)——によるものだ、とプラムは説明している。

歴史的相対主義は啓もう運動の自信に対する攻撃として始まり、人間の歴史は理性の着実な勝利であるとする考へ方を笑つた。マルクス、コント、バレートウ、フロイトなどは、人間も国家もいかに非合理的な力に左右されるものであるかを示したのである。そして、こういう風に、自分が気がつかない非合理的な力によつてきびしく制約されるとすれば、歴史家は歴史について偏見のない公平な見方に達することはできなくなる。多くの歴史家はそれが不可能であるばかりでなく望ましくないことと考へた。そこで歴史家の役目は感情移入、すなわち過去を自分の時代のために再創造するために過去に自己を投射

することに。各々の時代は現在についての自己の体験を深めるために過去から自己の欲するものを引き出すということにもなる。歴史の解釈や提示はすべて歴史家一人の心と心の中にある。歴史の世界は想像力によって再創造され、われわれの心の中に存在する実体のない世界である」ともいえる。ところが、われわれは自己を捨てることができないように、完全に過去に入ることはできない。われわれにとって進歩と思われるものが過去の人々には退歩と映るかも知れないし、その逆もまた真であろう。歴史に目標というものが存在し得ない以上、進歩についての判断を下す尺度となる客観的標準はない。したがって、歴史が人間の進歩に対する信念を正当化するという考えは論理的不合理であり、せいぜい役に立つ妄想に過ぎないということになる。歴史哲学者は歴史が知的職業であることを認め、それが小説や詩や劇のように教育的、文学的価値をもつことさえ認めるだろうが、彼らにとって我慢のならないのは歴史が社会的目的をもつということ、つまり過去を分析することによって未来を制御できるようにするという考え方である。とりわけ、彼らは人間の歴史に客観的、普遍的な妥当性を認めようとはしないのだ、とプラムはいう。

こういう歴史観に立って書かれた歴史は、哲学者、劇作家、歴史家、おそらく教師にとっても結構な精神の糧かも知れないが普通一般の人間にとっては無用のものである。人間は過去が存在したことを信じ認める。活動する人間にとって、他のいかなる態度もありえない。そして過去は存在するが故に、彼らに

とってそれは意味をもっていなければならぬ。そこに、歴史のバタンとその繰返しの論理を見出そうとしたシュペングレーやトインビーのごとき歴史家が一般読者に迎え入れられる余地があったのだという。シュペングレーもトインビーも、まがいものでも理論をもっていた。シュペングレーの生物学的歴史観がいかに見当違いのものであったかは改めて触れるまでもない。また客観的、科学的であることを標榜しながら、トインビーの『歴史の研究』ほど主観的な歴史書は少ない。それにもかかわらずトインビーが多くの一般読者に読まれるのは、専門の歴史家が人類にその経験の性質を説明するという歴史家の社会的目的を果さなかったからである。すべての人間は複雑で見当のつかない歴史のどこに自分が立っているかを知りたがっている。少なくともトインビーは彼らにそれに対する答えをあたえた。その答えがまやかしかで愚にもつかないものであろうと、説明しようとはしたのである。悲劇はトインビーが西欧文化の危険な死滅しつつある階層に属していることにある。そのため彼は歴史を意味づけ人間の希望に多少なりとも根拠をあたえてくれる歴史の唯一の局面、すなわち人類の物質的進歩を無視する結果になったのである。人類の幸福と福祉に多大の貢献をなしてきた西欧世界が、物質的進歩を尊重せずに、シュペングレーやトインビーのような不正確で悲観的な幻想家を受け入れたのは歴史の皮肉のひとつだ、とプラムは極言している。

これと並んで一般読者の過去に対する知識欲を満たしているものに、ウェッジウッド女史によって代表される文学的歴史家

(literary historians)がある。この種の歴史家は専門の歴史家がやるような史的分析に無関心であるか、または、故意にこれを避ける。ウェッジウッド女史は、歴史というものは小説や劇や詩と同様の意図をもつものであり、過去を喚び起こすことによって、文学と同じく想像力に訴えるものであると考える。女史はまた、歴史家は歴史の「なぜ」よりもむしろ「いかにして」に専念すべきであると信じているが、そこに専門の学者と文学的歴史家との間の越えることのできない隔りがある、とプラムは指摘する。ウェッジウッド女史の書くような歴史書は物語りとしてはおもしろく、文学的、教育的価値もあるが、歴史としては本質的に欠けるところがあるというのである。

以上あげたいくつかのタイプの歴史は、結局ニヒリスティックで社会的に無力である。そのわけは、これらの歴史がすべて「進歩の概念」という歴史についてただひとつの確かな価値評価を強情に信じようとしなからだ、とプラムはいう。彼のいう、歴史における進歩とは、環境に対する人間の増大しつづける制御が歴史的に実証できるということ、この増大する制御のおかげで人間の寿命が延び、その生活がより健康になり安定して暇ができ、人類そのものの数が増大し、よりしつかりと定着し、ますます物質界を支配できるようになったことなのである。そして、その結果として——これについては多少議論の余地があるが——人間としての洗練(refinement)度が高まったことをも意味する。過去が自己の頭の外側に存在することを信ずる気になれるどんな歴史家にとっても、人間が進歩したという

事実是否定しがたいことのように思われる。この過程を調べて記述すること、それがいかにして生じたかの説明を試みることに、そしてこのテーマを歴史家としての社会的目的たらしめることは、まさに歴史家の第一の任務たるべきである。人間は進歩するというこの真理がふたたび率直に受け入れられ、その理由、その成行きが一貫して想像豊かに探求され教えられるならば、歴史は現在よりもはかり知れないほど豊かな教育となり、西欧文化においてはるかに効果的な役割を果たすことになるう、とプラムは力説する。勿論、進歩という概念はもっぱら西欧の概念であって、日本も含めて東洋史にはそのまま当てはまらないが、西欧の一歴史家が歴史学の危機をどう見ているかを知る上でプラムの見解は十分に参考になるであろう。

哲学については、アーネスト・ゲルナーが最近の哲学の由来とその行き詰り状態を概観したあと、哲学の本質に立ち帰っている。ゲルナーは哲学こそ或る重要な論理の意味において人文学の頂点に立つものだという。まず第一に哲学的思考の本質はその他の人文諸学の本質と連続しているといえる。いやそればかりでなく、日常生活の思考とさえ連続している、理知的な人が哲学的思考から日常的思考へ移行することは左程むずかしくないのだから。(これに対して高等科学のあるものと日常的思考との間には長期にわたる訓練によらなければ越えられない大きなギャップ、非連続がある。)第二に、この互いに理解できる学問の領域において哲学にまわされるのは、比較的困難な、抽象的、一般的な、絶えず再発する厄介な問題である。つまり、

歴史、法学、文学研究などの中で起こる最も一般的で本質的な問題（例えば因果律、正義、美など）は、とりもなおさず哲学なのであって、これが系統的に取扱われた場合、その問題が発生した特定の学問の問題としてよりはむしろ「哲学」として分類されるのである。

この事実は哲学の危機を判断する主な糸口になる。哲学の動揺や混乱状態は、哲学がその一部をなしているより広い概念の有機的組織が陥っている困難のきざしにほかならない。ここにわれわれはロイ・ハロッド卿が経済学において発見した加速度原理のごときものを見る。哲学は人文的思考の基礎的概念を提供しているのに、人文的文化全体に或る不安が感ぜられると、それは何層倍にもなって哲学に反映されるのだ、とゲルナーはいう。

「人文的文化」(humanist culture)とは何か。それは本来、読み書きの能力(hierarchy)に基づいた文化といえよう。

(それは一方では読み書きのできない「蛮族的」文化と区別され、他方では読み書きの能力を超えた科学的文化と区別できる。)そして人文的知識人は、本質的に、ことば——とりわけ書きことば——についての専門家として、世界についての知識の源として、知者(knowers)として、誇りをもってその役割を果たしてきたのである。今や、彼らは知者としての役割を失おうとしている。現代哲学の特徴であることばに対する異常な敏感さ、その使用にあたっての自意識過剰はすべて人文的文化自体が脅威を感じていることから来ている。人文的文化はこと

ばを現実と関連づける能力を失いつつあるのである。人文学のことばの方が科学のことばとは比較にならない程、われわれ人間の本性、われわれの生活に密着しているが、他方人文学がいやしくも真剣な意味で信頼すべき知識を含んでいるかどうか明白ではない。その点、最近の科学は知識の源として人文学よりもはるかに立ちまざっているように思われる。そこで哲学としては、知ること(≡知識)と人間の存在が文化の中でどう関連しているかその様式を研究することを根本課題とすべきである。このような研究が哲学と呼ばれよう和社会学と呼ばれようそれは問うところではない、とゲルナーは結んでいる。

そのほかには、グレアム・ハフが、文学教育においてリーヴイス流の「峻厳な」批評方法が、学生にすぐれた作品の性質について学ばせるよりは、まずい作品にだまされまいとする単に警戒的な態度を身につけさせるだけという害毒を流しているかに思われると指摘し、学生には批評を少なくしてもっと多く読ませるべきだと述べている。経済学については、J・R・サージャントが計量経済学に関連して、イギリスでは教育計画の中で数学を一層重視すべきだと強調している。

冒頭に触れたように、この論文集はスノーの「二つの文化」論をきっかけとして生まれたものである。イギリスの論壇は容易に興奮しないものと承知しているが、重要と認められる問題が提出されれば、その論議を不毛に終らせないよう、じっくりと問題に取組むだけの手堅さをもっているのである。

(一橋大学助教授)